

芸術活動に対する 自己効力感測定尺度の作成

宇 恵 弘*

A Development of a Scale for Self-efficacy on Arts Activities

Hiroshi UE*

The purpose of this study was to develop a scale for the self-efficacy on arts activities. As a result of data analysis on the 359 university students, two factors, i.e. task factor and situational factor were extracted. Reliability of the derived scale was confirmed by an alpha coefficient ($\alpha=.84$) and test-retest indices ($r=.65$), and its validity was proved via the relationship between the scale and other measures which are the achievement motivation and the carrier of participation in arts activities.

key words: self-efficacy, arts activities, scale development

問 題

自己効力感とは、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指す(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)。自己効力感には課題特異的な自己効力感と一般的な(一般性)自己効力感の2つの水準があると考えられている。課題特異的な自己効力感とは、学習や運動など場面や課題に依存する効力感であり、一般性自己効力感とは、場面や課題に依存しない効力感である。

この2水準の自己効力感の測定は質問紙法によることが多く、学習に関しては伊藤(1996)の尺度が、運動に関しては岡(2003)の尺度がその代表としてあげられる。一般性自己効力感の測定には成田他(1995)の尺度がある。

ところで、学校教育場面での対象教科を考えると、国語や算数などの学習系の教科と、体育や美術などの技術系の教科に分けることができる。上記に述べたように、課題特異的な自己効力感の研究では学習や運動との関連は検討されているが、美術や音楽といった芸術活動を対象とした実証的研究は少ない。

吉田(2011)や保坂・音山(2016)をはじめとした理論的・実践的研究により芸術活動による自己効力感の向上は指摘されているが、今後、芸術活動に対する自己効力感の程度を測定し、その変動等を検証することにより、先行研究で指摘さ

れている点を確認する実証的研究が求められる。そこで本研究では、芸術活動に対する自己効力感に関する研究の発展に寄与すると考えられる、芸術活動に対する自己効力感測定尺度の作成を目的とした。

方 法

調査時期 2017年7月から8月。

調査対象者 大阪府下2校と奈良県下1校の4年制私立大学の学生359名(男子学生124名,女子学生234名,性別不明1名,平均年齢 19.8 ± 1.2 歳,範囲18~27歳)を対象とした。

調査内容 岡沢・北・諏訪(1996)、岡(2003)、藤田(2012)などの運動に対する自己効力感や有能感の測定項目の文言を一部変更し13項目の芸術活動に対する自己効力感測定尺度(以下, Arts Self-Efficacy Scale:ASES)の素案を作成した。ASESは「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」(中間項は「どちらともいえない」)の5件法により回答を求めた(教示は付記¹⁾)。

尺度の妥当性の検証のために自己充実達成動機尺度(堀野・森, 1991;以下, 達成動機)13項目と自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982;以下, 自尊感情)10項目, さらに芸術活動の実施経験への回答を求めた。達成動機は自分なりの達成基準への到達をめざす動機であり, 自らと向き合いながら技術や能力を向上させる芸術活動とは関連があると予想された。自尊感情は成田他(1995)でも妥当性の検証に使用され正の相関関係が得られていることからASESにおいても同様の結果がみられると予想された。芸術活動の実施経験は, Benesse教育研究開発センター(2009)による調査を参考にした15種類の芸術活動を対象として, 幼少期から大学までを7つに区分(幼稚園・保育園, 小学校1・2年, 小学校3・4年, 小学校5・6年, 中学校, 高校, 大学)し, それぞれの区分での芸術活動の実施の有無を尋ねた。運動活動の研究では実施期間が長い場合に有能感が高くなることが示されていることから(筒井・杉原・加賀・石井・深見・杉山, 1996), 芸術活動の実施期間が長い場合もASESは高い値を示すと予想された。

倫理的配慮 調査実施にあたり, 調査用紙の表紙に本調査での倫理的配慮について明記し, 口頭でも説明をした。なお, 本調査は, 関西福祉科学大学の研究倫理委員会の承認を受けて実施された(承認番号17-18)。

結 果

項目分析の過程 項目への回答に偏りのみられた3項目を削除し, 残る10項目を対象としてGP分析とIT相関を調べた結果, 項目の識別力に問題はみられなかったことから, 探索的因子分析(最尤法, promax回転)を行った。固有値の減少から2因子解が妥当と考え, 因子パターンが.70以下の4項目を除いた6項目を抽出した(Table 1)。項目の内容から, 第1因子は「課題要因」と命名し, 第2因子は「状況要因」と命名した。抽出された6項目を対象とした因子分析の結果, 2つの因子で説明される分散は全分散の68.18%, 因子間の相関は.50であった。

* 関西福祉科学大学心理科学部

Department of Psychological Sciences, Kansai University of Welfare Sciences, 3-11-1 Asahigaoka, Kashiwara, Osaka 582-0026, Japan

Table 1 10項目を対象とした探索的因子分析の結果

項目	F1	F2	共通性
F1 (課題要因)			
少し難しい課題でも、自分なりに目標を持って上手に取り組める。	.83	-.02	.68
少し難しい課題でも、自分なりのペースで上手に取り組める。	.81	-.01	.65
少し難しい課題でも、自分に合ったやり方で上手に取り組める。	.78	-.02	.59
自分なりの目標を決めたら、あきらめずに取り組んでいけると思う。	.68	-.02	.45
少し難しい課題でも、練習すればできるようになると思う。	.63	.09	.46
努力さえすれば、たいへんの課題は上手にできるようになると思う。	.50	.11	.32
F2 (状況要因)			
あまり気分がのらないときでも、芸術活動をする自信がある。	-.01	.88	.77
忙しくて時間がないときでも、芸術活動をする自信がある。	-.06	.84	.66
少し疲れているときでも、芸術活動をする自信がある。	.06	.82	.73
道具(用具・楽器等)がそろっていないときでも、芸術活動をする自信がある。	.12	.44	.26

Table 2 ASESの性別による差の検定、ならびに正規性の検定

	男子学生の平均(SD)	女子学生の平均(SD)	t (df=356)	d	全対象者の平均(SD)	尖度	歪度	Shapiro-Wilk
状況要因	7.22 (3.36)	7.90 (3.34)	-1.82	0.20	7.66 (3.36)	-0.87	0.28	W=0.94, df=359, p<.01
課題要因	10.71 (2.59)	10.80 (2.51)	-0.30	0.03	10.77 (2.53)	0.62	-0.77	W=0.93, df=359, p<.01
合計	17.94 (5.02)	18.70 (5.04)	-1.36	0.15	18.43 (5.04)	-0.25	-0.12	W=0.99, df=359, p<.05

ASESの性別による差 性別を独立変数、ASESの尺度得点(各因子に該当する項目の評定値の合計; 尺度得点が高い場合、芸術に対する自己効力感が高いことを示す)を従属変数としてt検定を行った結果有意差はみられなかった(Table 2)。性別による差がみられなかったことから、以下、男女込みで分析を行った。

ASESの分布と正規性の検討 ASESの各種統計量をTable 2に示した。正規性の検定(Shapiro-Wilk)ではいずれの得点分布も正規性は示されなかった。しかし、度数分布の形状(Figure 1)や尖度と歪度の値から、2因子の合計得点については正規性が担保できていると考えられた。

ASESの信頼性と妥当性の検討 ASESの内的一貫性指標、約3カ月後の再検査調査(n=102)での相関、達成動機と自尊感情との相関、さらに、幼少期から大学までの7区分に6区分以上芸術活動を経験している学生を「高経験群」、全く経験していない、あるいは1区分のみ芸術活動を経験している学生を「低経験群」とし、この2群を独立変数、ASESの各種尺度得点を従属変数としたt検定の結果をTable 3に示した。自尊感情との相関に低い値を示す結果もあるが、概ね信頼性と妥当性を担保できる結果が示された。

考 察

本研究の目的は、芸術活動に対する自己効力感測定尺度の作成であった。一連の項目作成手続きの後、2因子6項目を尺度項目として採用した。第1因子は、芸術活動の課題が難しい場合でも活動に取り組む姿勢を尋ねる「課題要因」であり、第2因子は、芸術活動を実施する状況が困難な場合でも活動を行う自信の有無を尋ねる「状況要因」である。先行研究と照らし合わせると第1因子は藤田(2012)の項目に、第2因子は岡(2003)の項目にそれぞれ対応すると思われる。ASESは2因子から構成されるが、正規性の確保の点から尺度得点の分析には2因子の合計得点を使用することが好まし

1) ASESの教示: あなたの芸術活動に対する自信や意識についてお尋ねします。あなたは芸術活動に対してどのように感じたり、考えたりしていますか。芸術活動には、楽器の演奏、描画や造形、独唱や合唱(コーラス)、演劇やミュージカル、バレエや日本舞踊、ダンス、華道や茶道、写真やコンピュータグラフィックなどが含まれます。

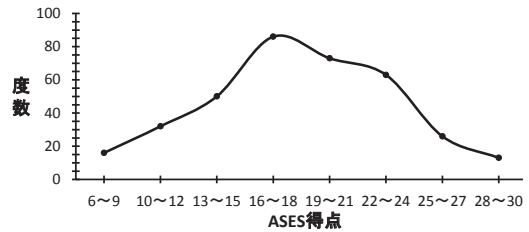


Figure 1 合計得点の分布

Table 3 ASESの信頼性と妥当性の指標

	α係数	再検査	達成動機	自尊感情	高経験群(n=81)の平均(SD)	低経験群(n=94)の平均(SD)	t (df=173)	d
状況要因	.88	.61***	.22***	.03	10.04 (2.88)	5.40 (2.37)	-11.68***	1.77
課題要因	.84	.61***	.41***	.26***	11.59 (2.32)	10.06 (2.77)	-3.91***	0.59
合計	.84	.65***	.36***	.15**	21.64 (4.42)	15.46 (4.09)	-9.57***	1.45

***p<.001. **p<.01

いと考えられる。

尺度の信頼性を示す内的一貫性指標と再検査信頼性指標の値は概ね良好である。妥当性の検証に使用した達成動機と芸術活動の実施経験については尺度の妥当性を支持する結果が得られたと考えられる。自尊感情については正の相関はみられているが高い値とは言えなかった。一般性自己効力感と自尊感情との間に正の高い相関がみられる(成田他, 1995)ことから、芸術活動に対する自己効力感と一般性自己効力感には質的な差異があるのではないだろうか。本研究の結果の範囲で述べると、芸術活動に対する自己効力感と一般性自己効力感の側面は含まれるが、自分自身に対する評価感情の側面は多く含まれない概念だと考えられる。

引用文献

Benesse 教育研究開発センター 2009 子どものスポーツ・芸術・学習活動 データブック—幼児から高校生のいる家庭を対象とした「学校外教育活動調査から」 Benesse 教育研究開発センター。

藤田 勉 2012 体育授業における有能感下位尺度の予備的検討 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 63, 69-76.

堀野 緑・森 和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315.

保坂 遊・音山若穂 2016 臨床美術による表現活動が児童養護施設入所児童に与える効果について 保育学研究, 54, 193-204.

伊藤崇達 1996 学業達成場面における自己効力感、原因帰属、学習方略の関係 教育心理学研究, 44, 340-349.

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—教育心理学研究, 43, 306-314.

岡浩一郎 2003 中年者における運動行動の変容段階と運動セルフ・エフィカシーの関係 日本公衛誌, 50, 208-215.

岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 1996 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究 スポーツ教育学研究, 16, 145-155.

筒井清次郎・杉原 隆・加賀秀夫・石井源信・深見和男・杉山哲司 1996 スポーツキャリアパターンを規定する心理学的要因—Self-efficacy Modelを中心に— 体育学研究, 40, 359-370.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

吉田秀文 2011 音楽学習における動機づけと持続性に関する一研究—自己調整学習の研究成果を踏まえて—群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 46, 13-19.

(受稿: 2017.11.26; 受理: 2018.2.26)